

キャラクター創作における顔への認識 過程の” いちおうな” 理解

近年の科学技術、特に脳科学への発展から、様々な機器によって、脳の機能解明が進んだ。CT（コンピュータ断層撮影）、MRI（核磁気共鳴装置）はもとより、NIRS（近赤外線光機能イメージング装置）などによって、以前に比べ格段に脳機能の理解できるようになった。これらの機器の発達に伴う脳機能の解明は、ヒトの脳がどのように働いているかを詳細に知ることができるようになったとともに、ヒト特有の認知についても、随分と検討できる判断材料が増えてきたように思われる。そのヒト特有の認知の中でも、ヒトがヒトをどのように理解しているかといった疑問は、哲学といった学問も含め、ヒトを深く知るための重要なキーワードのひとつでもある。

今回、サークルのキャラクターを創作する際に、このヒトがヒトとして、何をもって認識しているのかについて、ふと不思議に思うことが多々あった。これは当方の心象のみならず、キャラクターの作成に寄与して頂いたW先生からの言葉からも示唆される。W先生曰く、ある日、「何気ないモノがふとキャラクターに見えてくる」と述べられた。また、キャラクター推進部部長のXさんが、あるモノに貼りつけた目玉でも、なぜかそこにキャラクターが出現し、ただのモノなれど、目玉のある事象によってヒト的に認識されるモノに当方が苦笑したことも少なくはなかった。これはなぜであろうか？

そこで本新聞では、この疑問を解決する一助として、ヒトがあるモノをもって、それをヒトとして認識する過程についてまとめてみた。

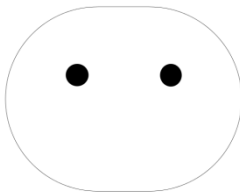


図1 単純化された顔への認識

シンプルなキャラクターの一例として、創作した図1「単純化された顔への認識」を提示した。これは目玉、顔の輪郭から構成される要素のみであるが、多くのヒトはこれを顔として認識できることと思われる。こうした、顔に見えるモノというのは、人間が持っている「顔細胞」によるとも言われ、認識細胞、あるいは、顔ニューロンなどと呼ばれることもある¹⁾。あるいは、おばあさん細胞とも言われるような、一対一の仮説もある²⁾。さらには、ヒ



図2 教会

と判断してしまうような現象についても報告されている³⁾。ここで、本来顔ではない教会、植物について画像を提示しても（図2, 3）⁴⁾、これらが顔に見えないヒトは少ないと思われる。このことから明らかではあるが、ヒトが顔を認識する過程は案外単純であり、サークルのキャラクター創作への道も日ごろのなにげないモノへの観察の仕方によって可能であることが示唆された。すなわち、見方（考



図3 植物

え方）の変化でもって、誰にでもあるモノを題材とするキャラクター創作が可能となることが示唆された。

1) 顔細胞: <http://matome.naver.jp/odai/2137329403614559701/2137705176694590703>.(閲覧 2014.12.26)

2) おばあさん細胞: <http://ja.wikipedia.org/wiki/おばあさん細胞>.(閲覧 2014.12.26)

3) シミュラクラ現象: <http://ja.wikipedia.org/wiki/シミュラクラ現象>.(閲覧 2014.12.26)

4) <http://matome.naver.jp/odai/2137329403614559701>(写真). (閲覧 2014.12.26)

植
い
き
新
聞



植物いききサークル

第43号

発行者: 犬丸、
渡辺、X